

# 下野市立古山小学校

## 1 学校課題

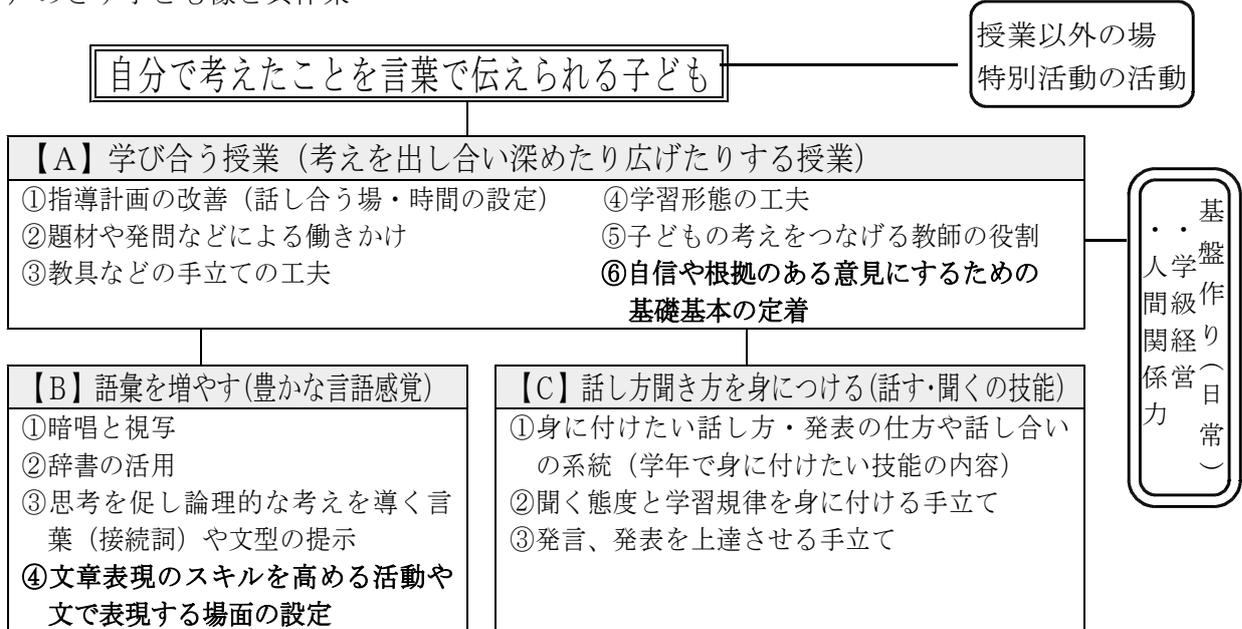
表現・コミュニケーション能力の育成をめざして

～言語活動の充実と、学び合う授業づくりを通して(3)～

## 2 本年度の研究について

昨年度に引き続き、上記のテーマで国語・算数での授業改善を柱に課題研修に取り組んだ。

### (1) めざす子ども像と具体策



本年度は、具体策に次の二つを追加した。

一つ目は、全国学力調査等の結果や、とちぎっ子学力学習状況調査および学力向上改善プランの実施を踏まえて、A-⑥「自信や根拠のある意見にするための基礎基本の定着」を具体策の一つとした。

二つ目は、思考をより確かなものとする上で大切な、文章で表現する活動に改めて焦点を当てるために、B-④「文章表現のスキルを高める活動や文で表現する場面の設定」を加えた。

### (2) 研修の進め方

- 3回のS&Uコラボ研究授業を柱に実践的な研究を進める。なお、S&Uコラボ事業のうちの1回は「書くことが育てる思考・表現力」と題して、講話と演習を行うことにした。
- 各学年の研究授業に当たって低中高ブロックごとに指導案検討会を運営し、発達段階や指導の系統、児童の実態などを検討し合い課題解決を図るとともに、普段の指導に生かしていく。
- 学校課題研修の授業研究会以外に、学級活動や理科の公開授業の機会が予定されていた。それらの場においても、国語・算数での学校課題研修の成果を生かす機会ととらえて授業研修を行うことにした。

### (3) 授業研究

月日	研究授業	指導助言者 (☆はS&Uコラボ事業)
11/17	1年算数「たしざん」	☆宇大教育学部教授 日野 圭子 先生
12/10	2年国語「しょうかい文を書こう」	☆宇大教育学部准教授 森田香緒里先生
12/15	5年算数「割合」	☆宇大附属小教諭 築島 淳 先生
*ワークショップ		
9/22	「書くことが育てる思考・表現力」	☆宇大教育学部准教授 森田香緒里先生

### 3 成果のみられたこと

3回の研究授業それぞれに見られた主な成果は、次のようなことだった。

#### (1) 1年算数「たしざん」

○ストーリー性のある問題提示（題材や発問などによる働きかけ【手立てA-②】）



動物園への校外学習後であったことに絡めて、「動物園内を巡りながら足し算の問題が提示されていく」という、単元を通した問題提示を工夫した。問題に興味関心を持って取り組んだり、単元を通して意欲を持続させたりすることができた。

○発表を補助する教具（教具などの手立ての工夫【A-③】）

個々やペアでの意見交流で出てきたいくつもの意見を全体に発表させたり比較させたりするための発表ボードなどが有効に活用されていた。それらは、継続して学校課題に取り組む中で多くの学級に定着してきたものだが、1年生の授業でも有効な手立てとなっていた。

#### (2) 5年算数「割合」

○課題解決を図るためのグループ活動（学習形態の工夫【A-④】）

発展的で活用力が問われる課題にグループで取り組む授業だった。個々に問題解決した後での意見交換ではなかったが、児童は、お互いの理解度や考えの違いをうまくすり合わせながら活発に話し合い、グループで課題解決を図っていた。前述の1年生の授業でのペア学習も同じだが、児童間の「聞く・話す」表現力が学習形態を工夫する中で育ってきていること、そして、児童間の親和的で協働できる関係も醸成されていることを見ることができた。

#### (3) 2年国語「しょうかい文を書こう」

○学級活動や日常の学級経営などとの関連を図った指導計画（指導計画の改善【A-①】）

友達同士の紹介文を書く単元だが、入学時から共に過ごしてきた深い関係性や来年度の学級編成替えを控えた思い出作りなどとも関連付けた。国語の時間を、文章を書くことやそのための取材メモ作り、あるいは書く内容を練る時間として位置付け、さらに、日常の活動や学級活動でも、友達について書きたい、改めて友達の良さや自分との関わりをとらえ直したい、という思いを高めた。そのことで、児童にとって表現する（書くことや話し合うこと）目的が明確な活動となるようにした。大きな単元構想の中の中核として国語の授業を位置付け主体的な言語活動を作ろうとすることは、次の学習指導要領の改訂の動向にも重なるものであると思う。

### 4 今後の課題

- 発表ボードなどの教具を活用したり、ペア、グループなどの学習形態を授業の中で適宜使い分け、児童間の考えを表現・交流させることが、学年を問わず定着してきている。しかし、特に一斉指導の場面では、個々の意見を採り上げたり補足したり、他の児童に返したりする教師の役割とその力量が問われる。その点に関しては、まだまだ研鑽が必要である。
- 上記にも関連するが、「子どもたちの多様な考えを引き出す」ということがまだ十分ではない。「表現する（話す・書く）」力は児童についてきているが、「表現の中味＝子どもたちの思考」について、考えを深め研修していかなければならない。授業に臨む前の、学習内容や教材についての理解を深めなければならないということである。教師個々が自己研修をすることももちろん必要だが、同僚性を発揮しながら解決していくこと大切である。
- 特に算数においては、前後の単元や全学年までの学習を土台にして子どもたちの考えが多様に出てくる。学習の系統や、児童が既習し多様にもっているであろう考え方や問題解決の仕方についての理解、という意味での教材理解や児童理解を深めていきたい。
- 朝の自学の時間を充実させたり、算数を主にできるだけ多くの時間でT.Tやコース別学習での指導が行えるようにしたりすることにも取り組んだ。児童一人一人にとっての学習が成立し、自信や楽しさを持って友達と学び合うことができるようにしたい、という願いは学校課題で研修してきたことと通じている。職員の経験年数や教育観なども多様だが、ここにも同僚性を発揮し我々の指導技量を高める場がある。